



‘痛み’は生命維持徴候だ！

厚生省によると通院している患者数は、第一位は高血圧症であるが、2位は腰痛症、5位が肩こり、9位が関節症と多くの人が慢性的な痛みを持っている。これら慢性の痛みは医療費の高騰につながり、国の生産性の低下となり、介護費増加など社会的損失は膨大な額となっている。

すでに、米国議会においては今世紀初頭に「**痛みの10年**」*¹の宣言を採択している。この背景には

- ① 激しい慢性痛に悩まされている患者が人口の約9%に上がって、それに掛かる費用が年間**650億ドル**（9兆円）と推定される。
- ② 神経学の発達から「慢性痛」の理解が大きく発展して、症状としての痛みではなく、病気としての痛み（慢性痛症）があることが判明してきた。
- ③ バイタルサイン（生命維持徴候）とは1.体温、2.脈拍、3.血圧、4.呼吸であるが、**第5のバイタルサイン**（fifth vital sign）*²として「痛み」が位置付けられて来た大切な局面にあり、広く国民に知って貰う必要性がある。

米国に引き続き、欧米が慢性痛による社会的損失の重大さに対応して、パラメディカルや家庭医の教育をはじめ社会に浸透させて医療体制の見直しをして行こうとしている。

わが国における慢性痛の患者は**2000万人**と言われ、医療費抑制が叫ばれている中で経済的損失は年間4兆円にあがると推定されている。主訴で一番多い痛みに対して医学教育は不十分です。がん患者における徐痛率は欧米の80%に対して**60%**いわれている。モルヒネ換算使用量率にしても日本は低く米国の20分の1、カナダの14分の1、イタリアの半分の使用量率です。

特に、**高齢者**はあまり痛みを感じていないという既成概念があるために、十分な徐痛につながっていない。高齢者は痛みが病気の進行を意味していると恐れている場合とかこれまでに受けた診療でずさんな痛みの処置のために訴えるのをためらっている場合がある。逆に、痛みを感じない高齢者のために心筋梗塞や虫垂炎などの発見が遅れる事がある。そのためにも、痛みを第5のバイタルサインとして放置しない医療をめざすべきです。

*¹1990～1999「脳の十年」であった。そして2010～2019は「精神の十年」の予定。

*²第五バイタルサインとして救急では「意識」とか「酸素飽和度」が扱われることもある